

感情の深さの次元

佐藤 幸治

一、感情心理學研究に對する覺書

私は感情心理學の研究に當り次の如き設問をなし次の如き態度を以て進まうと思ふ。先づ問題を一應次の如く大別する。感情の本質、之に關聯して他の心的事象との關係に關するもの。感情の屬性に關するもの。感情の分類に關するもの。感情と價值との關係乃至身體との關係に關するもの。感情の發達心理學。感情の病態心理學。感情に關する應用心理學。以上の如きものは先づ感情一般に就いて問題となるが、更に個々の感情に就いても之に相當した設問がなされる。勿論此等の諸問題は互に密接な關聯を持ち具體的な研究に於ては多く互に交叉しつゝ、解明せらるべきものであるが、感情心理學の問題の體系として今、凡そ右の如きものを考へて置く。此等の諸問題に就いては從來も多くの學者に依つて研究は重ねられてゐる。併し感情の領域こそ現代の新しい心理學に對し再考察を要求しなほ解明の殘

されてゐる重大な、そして困難な部分である。我々は在來の多くの研究を再吟味すると共に新しき嚴密なる事實を蒐集することに依つて此等諸問題の闡明に努めなければならぬ。心理學に於て個々の事實の探究は最も肝要とせられるところである。併し其の根柢に體系的な研究の組織を缺くならば學は發展することが出来ぬ。一つの學說もそれが各方面の事實を統一的に矛盾なく説明し得て始めて始めて其の價値を實證し得る。私は一方かゝる感情心理學の體系を豫想しつゝ、一步々々着實な事實的研究の歩を進めて行き度いと思ふ。かゝる研究を進めるに當り私は、人間を觀るに就いて之を抽象して環界に於ける一箇の生物とも爲すことが出来るが、併し根源的には歴史的社會的な世界に於ける所謂身心靈の統一的存在と見るべきであることを顧慮すると共に、他方兒童、動物、未開人、精神病者、老人等に對する其の發達の關係をも見失はぬことに留意し、感情研究に於ても是の如き具體的な人間を究極的背景におくことを忘れないやうにしたい。前の設問も見らるゝ如く此の立場からなされてゐる。かゝる立場に立つとき我々の指標となるものは從來の感情そのものに關する實驗的研究の外、他の領域の心的事象に關する實驗的研究、感情に關する常識の探查並びに言葉使ひの詮索、^(三)而して特に重要なものは感情に就いての現象學的

研究と發達心理學的研究とであらう。私は大體右の如き設問をなし、右の如き態度を以て感情心理學の研究を進め度い。併しこれは私一人の短時日の研究に依つて能く爲し得るものではなく長年月の持續的研究と多數同志の協力とに俟たなければならぬ。

註 (一) 感情の發達心理學としては、兒童、動物、未開人、精神病者、老人等の感情の發達の見地に於ける研究が考へられるが我々が詳細に事實について探究し得るものは此のうち兒童及び精神病者の感情であるから特に此等に就いて嚴密なる事實の蒐集をなし、之を中心として考察を進めればならぬ。

(二) 感情に關する應用心理學とは自己及び他人の感情を動かす、換言すれば其の統制及び激發を爲す方法を攻究するものを云ふ。かゝるものは一方一般人が心理學に對し始と専ら期待するところのものであると共に、他方専門の心理學者に依つては不當にも甚だしく排斥せられて來た問題である。凡てかくの如き實際問題となると其の解明は極めて困難になるが、併し其の間なほ或る程度の法則性も有るのであり且つ其の解明に對する要求も切實なものがある以上、此の方面にも研究は向けられねばならぬ。テツツアールが人間學 *Psychognosis* と呼んだアリストテレスの「レトリカ」から系統を曳いてゐる心理學の傍流など、主として此の興味を持つものであり、我々の研究にも參考となるものが少くない。

(三) 「言葉」に依つて心理學者が迷はされ主知主義的な原子觀に陥らしめられたことのあつたのは事實であり、ゲエームズやベルグソンが之に就いて批難を與へたのは至當である。併し言葉はまた常識と同じやうに全體的な事態に對する繊細な、ハイスの言を借りれば、本能を持つてゐる。かゝる意味で吟味は缺いてはならぬが、言葉も事態の理解の一つの便りとなる。

二、問題

今私は右のやうな立場から茲に感情の深さを問題としたい。感情の深さは性質

とか、強さとか、持続性等と共に感情の屬性の一つをなすものである。感情の深さに就いてはクルエーゲル^(一)、ハース^(二)、コーン^(三)、グロース^(四)、千葉胤成教授^(五)或ひはベルグソン^(六)、シエーレル^(七)精神分析説の人々^(八)なども夫々説をなしてゐるが、併し其の述ぶるところ甚だ一致しないものが多い。私は此の感情の深さの概念の下に意味せられる種々の事態を明かにすることに依つて、感情の具體相の一面を描くと共に、深さの概念の適合する事態を吟味し、之を限定しようと思ふ。

註 (一) Krueger, F.: Die Tiefendimensionen und die Gegenständigkeit des Gefühlslebens. (Festschrift zu Joh. Volkels 70. Geburtstag. 1918.) 2. Aufl. 1931. (I). Das Wesen der Gefühle. Entwurf einer systematischen Theorie. 1928. (II).

此の外私の論文「全體性と感情」(哲學研究、第十六卷一〇三—一三六頁、昭和六年)及び解説「クリエーゲル」(感情の本質)(生理學研究第九卷九五—一〇三頁、昭和七年)參照。

(II) Haas, W.: Über Echtheit und Unechtheit von Gefühlen. Zeitschr. f. Pathopsychol. Bd. 2, S. 349—381. 1914.

(III) Cohn, J.: Die Stellung der Gefühle im Seelenleben. Arch. f. d. ges. Psychol. Bd. 72, S. 303—317. 1929.

(IV) Grossart, F.: Gefühl und Strebung. Grundlinien einer seelischen Gefühlslehre. Arch. f. d. ges. Psychol. Bd. 79, S. 385—452; Bd. 81, S. 49—165. 1931.

(五) 千葉胤成「無記感情について」(朝永博士遷曆記念哲學論文集一七七一—二〇九頁)昭和六年。

(六) Bergson, H.: Essai sur les données immédiates de la conscience. (1888) 23. éd. 1924.

(七) Scheler, M.: Der Formalismus in der Ethik und die materiale Werthe. (1916) 3. Aufl. 1927.

(八) 例へば Freund, S.: Vorlesungen zur Einführung in die Psychoanalyse. 1920.

三、考察

深い感情と云ふ場合、ある種屬の感情は一般に深いといふ場合と、或る特殊の感情につき或る條件の下に於てそれは深いと云ふ場合とを、分けることが出来る。例へばクルューゲルに依れば凡ての價值感情は深い感情であるが、かゝることが認められるとすれば、それは前の意味の深さであり、ハースに依れば怒りとか悲しみとかは心の表面にも漂つてゐることもあると共に、心の奥に潜んでゐる場合もあるが、後者が前者よりも深いとすれば、これは後の意味に於てある。是の如き分け方はなほ検討を要するが、先づ分けて見た上で吟味を試みよう。

(二) 一般的な意味に於ける感情の深さ。

或る感情は一般に深いと云つても、之に次の二つの場合を分けることが出来る。第一は例へば怒りの如きについて云ふ場合であり、第二は例へば價值感情の如きものがさう云はれる場合である。即ち前者は生命的な意味よりの深さであり、後者は精神的な意味よりの深さである。換言すれば一つは發達的に根源的であると云ふ意味での深さであり、他は發達的に高度の組織を持つたと云ふ意味に於ての深さである。先づ此の二つを分けて見る。

(イ) 生命的な深さ。「深い根を持つた」[抜き難い]と云ふ意味の「深さ。」

これは云はゞ原始的な或ひは根源的な深さである。これは一方發達心理學的に、他方層分析的に明かにされる。従つて一方特別の發達心理學的考察も必要となるが此處には其の輪廓丈に止めねばならぬ。發達的に原始的な感情としては如何なるものがあるであらうか。ベルンフェルト⁽¹⁾は乳兒心理學に於ける感情の系譜に於て最も根源的なものとして不安 *Angst* をとり之より感情の分化を説き、ストラット⁽²⁾、之に倣つてブリツヂェズ⁽³⁾なども根源的な未分化的感情として興奮 *Excitement* をとつてゐる。かゝるものに對して他の一面として安或ひは安靜も當然存在せねばならぬ。不安安の如きはかなり原始的な動物についても實證し得るであらうし、又精神病者の癡呆狀態等も恐らく此の二つの状態の交替となるであらうから、最も原始的と云ふ意味ではかゝる感情こそ最も深いこととなる。併し常識的に考へて不安安の如きものが「深い」と呼ばれることがあるであらうか。かゝるものはむしろ根源的な或は原始的な感情と呼びなされるのが普通であらう。常識的に原始的な感情のうち「深い」又は「深い根を持つ」と云はれるのはかゝる根源的なものよりも更に分化した怒り、恐れ、の如き感情である。即ち情緒と云はれる、或ひは此の場合には激情と

稱する方が一層適切な感情の群である。これには此の外喜び、悲しみ、親としての愛情の如きものも入るであらう。此等は本能的な感情とも見られるが、又從來七情(四)とも呼ばれ來つたものである。常識的には併し此等の感情が兒童にもあり、動物にもあり、崩壞してゆく精神病者等にも比較的遅く迄認められるから「深い」と云ふのではなく、寧ろ此の世間に於ける人間生活の體驗及び觀察から是の如き判断を與へてゐる。即ち云はゞ層分析的に設定されてゐるのである。然らば其の基礎となる事實は如何なるものであらうか。通常の心理學はかゝる激情に對し反省が如何になされるか、換言すれば自我が自己の激情に對し如何なる態度をとるかを、殆ど問題にしない。(五)併し常識は此の事態を見忘ればしない。即ち抑へようとしても中々抑へることの出來ない、併しさう云へば或ひは激しいと云ふのと同じになるかも知れぬから更に適切に云へば、斷たうとしても容易に斷つことの出來ない感情を「深い」又は「深い根を持つ」と云ふのである。かゝる立場から激情又は情緒が省られるときそれは「煩惱」或ひは“passio”の性格を持つて來るのである。佛教で煩惱と云ひスピノザなどが passio と云ふとき、それは情緒の見方に主知主義的見方と倫理學的見方とを混入したものであるとの批難を受けるかも知れない。(六)確かにさう云ふ點もあらうが、

併し其れ丈では濟まない。具體的な人間に於ては或る激情は其の人の自我の統制を越えて跳梁し、自我を顛覆しさへもするものとして感ぜられることがある。かゝる事實は主知主義的な假構でもなければ、又之を直ちに倫理學の領域に移すことも出来ぬ。其れは第一に嚴然たる心理學的な事實である。山中に入つて益、山を見失つた曾ての所謂内省には此の事實は見えぬであらう。併し勿論從來の見方も、又其れに依つて生じた感覺の如きも全然虚假のものではなく、一つの心的事象の發展であり其の產物である。それは世間一般の人には到底達し得ないやうな一方向への發展であり其の產物である。それは甚だしく一般人には疎いものである。從來の心理學的内省は此の方面にのみ向けられた。併し學は常識に對し只疎くなるだけのものであるべきではなく、他方もつと重要な課題として常識を深め、或ひは之を止揚すると云ふことを持つてゐる。現象の分析的方向のみに向つた從來の心理學に對し現代の主なる心理學は基調として全體觀を持つてゐる。かゝる見方の必要なことは西田幾多郎教授なども夙に力説されてゐたのであるが、獨逸に起つた實驗的方面からの此の主張は現代心理學に對し殆ど決定的な轉回を與へたわけである。此の立場に立つとき具體的なものに對する視察も深められることが出来る。激情

の煩惱的性格の如きも此の視點からは正當な姿態を現はすであらう。然らばかゝる深い根を持つ情緒、又は激情としては如何なるものが擧げられるであらうか。スピノザは情緒を直ちに“*pathema animi*”とも呼ぶ一方、更に之を我々がその十全なる原因であるもの即ち“*actio*”と我々がその不十全なる原因である“*passio*”とに分けて居り、一々の情緒について之と關係して道德的判斷を與へてゐるが、煩惱的性情を持つ情緒又は激情としては此の中“*Passio*”をとるのが至當である。何れの感情が²²であるかは特別に述べてゐないが大體道德的に惡であると爲されるもの、即ち憎とか不快とか黨派心とかが之に屬するものであらう。佛教の方では煩惱としては種々の分類があるが、或るものは貪、瞋、癡、慢、疑、惡見の根本煩惱と忿、恨、覆等二十の隨煩惱とを分ち、或るものは誤れる思惟より起る分別起煩惱と本能的に生得的に身と共にある俱生起煩惱とを分つてゐる。併し此のスピノザの“*Passio*”にしても佛教の煩惱にしても、我々の意味で之を心理學的に生かすにはなほ詳細な吟味を必要とすることは明白である。心理學者として本能と情緒或ひは激情とを關係せしめて考察したものの、代表的なものはマクドゥガルであるが、對應せしめられた感情としては恐怖、嫌惡、憤怒、慈愛等から慰安、愉快迄十數箇のものがある。心理學者が通常本能

と呼ぶものは生物學的に設定せられるものであるが、之に對して人間の觀察から設定せられたものとして「人間の本能を再考察する上に極めて暗示的なものは、佛敎の財欲、好色欲、飲食欲、功名欲、睡眠欲を擧げる五欲説である。此等の説はいづれもなほ検討を必要とするものであるが「斷ち難い」と云ふ意味での「深い」感情は大體右の如きものであることは認められるであらう。此等の感情は生命の存する限り、或ひは自我の持續する限り、若干の消長はあるとしても續くものであり、文化人の日常生活に於ては通常相當統制され抑壓せられてゐるが、なほ時々此の統制を覆して荒れ狂ひ、心猿意馬の嘆を爲さしむるものである。かゝる場合顛覆せられる理性的感情の如き、寧ろ甚だしく淺い感情であるとも見られるであらう。

以上を要するに感情の深さとしては「深い根を持つた」容易に「斷ち難い」と云ふ意味でさういはれるものがある。これは原始的根源的な、特に「安不安、快不快等よりも恐れ、怒り、愛、憎等の如き志向的な感情について認められる性質であつて、發達した自覺的自我を背景とするとき特に其の煩惱的性格が明白となり、其の深さを切實に銘肝せしめるものである。かゝる原始的感情は之を「低い」とも云ひ得るであらう。併し低いと云ふときは感情を並列して只發達の低い、或ひは價値的に低いと云ふに止

るに反し、「深い」と云ふときそれは其の上のものゝ一つの根柢をなすと云ふことが、或ひは人間の全構格を背景とすることが含蓄されてゐる。之に關係してかゝる本能的なものは抑壓せられ易いといふ點から、抑壓せられたものとしての「深い」感情も考へられるが、これに就いては後に特説しようと思ふ。「深い根を持つ」と云ふ意味で感情の深さを問題にしたものは、深部心理學と呼ばれる精神分析説が多少之に關する外、特にないやうである。併し以上の如き心理學的事態の存在と之に對する言葉とを顧慮するとき、此の意味で感情の「深さ」を説くのは敢て不當ではない。

註 (一) Bernfeld, S.: *Psychologie des Singings*, 1925.

(二) Stratton, G. M.: *Excitement as an undifferentiated emotion. Feelings and Emotions: the Wittenberg Symposium*, pp. 215—221, 1928.

(三) Bridges, K. M. B.: *The Social and Emotional Development of the Pre-School Child*, pp. 198—211, 1931.

(四) 喜怒哀懼愛惡欲の七であるが、此等は之を怒懼と喜哀と愛惡と欲の四群に分けることが出来、怒懼は激情的對象的なもの、喜哀は情緒的状況的なもの、愛惡は情念的對象的なもの、欲は情欲的對象的なものとして、相當よく種々の情の典型的なものを集めてゐると思ふ。

(五) 精神分析説に於ては其の説明に於て不可の點も少なくないとしても兎に角問題としてゐる。例へば Freud, S.: *Das Ich und das Es*, 1923. に於て、平常確立され保持されてゐる「われ」Ichに對して、其の命令を肯かず勝手に跳り廻るやうに思はれる衝動「それ」Esを立て、ゐる。

(六) 例へば Wundt, W.: Grundriss der Psychologie. 15. Aufl. S. 210. 1922.

(七) 西田幾多郎「意識の問題」天正九年。特に「感情」六〇—九四頁。

(ロ)精神的な深さ。「深い心の構格に規定せられたる」統一組織せられた心を背景とせる」と云ふ意味の「深さ」]

これは前の原始的な生命的な深さに對し、むしろ對蹠的の發達した精神的な深さである。發達せる文化人に於て始めて現れ得る感情には一方心の表面に漂ふ淡い憂鬱とか、軽い反感とか、表面だけの敬虔な氣持などもあるが、他方落付いた愛情とか、悲壯な氣持とか、義務の感情とかも存在する。幼少の兒童等に於ては深い心の構格が未だ出來てゐないことゝ關聯して凡ての感情も一般に淺く、かゝる分化は多く生じてゐない。かくて右の兩者共發達した相當深い心の構造を豫想するものであるが、其の間自ら重要な差異がある。即ち前者は其の必要はないが、後者は持續的な統一組織を持つた心の構造に規定されてゐることを要する。淺い川は騒がしい波が立つが、深い川は淀んであまり波も立たぬやうに、かゝる深い心の統一組織に規定されてゐる感情は表面的には騒がしく現れず、寧ろ落付いた「深い」感じを與へるものである。前の抜き難い深い根を持つた感情が原始的な感情中限定されなければな

らなかつたやうに、此處に於ても深い心の統一的組織の「中心よりの規定を受けてゐる」ものが、其れを豫想してゐるものから特に限定されなければならない。かゝる感情は前項の感情の如く自我に對立するものではなく、寧ろ自我に統制された、自我と方向を一にするものである。其れ故それは煩惱的性格ではなく寧ろ理性的性格を帯びて來る。かゝる感情の例としては一般的には情操があげられるであらう。情操は一方には愛、憎、愛國心等の如き持続的な感情的態度とも云はるべきものを意味すると共に、他方には宗教、學問、藝術、道德等の價值に關する感情をも意味する。併し前者は統制された持続的な心に規定されてゐると云ふよりも、自我の反省に拘らず之を引ずり倒して了ふやうな場合が多く、寧ろ煩惱的ともなるものとして前項に入るべく、此處には特に後者が問題となる。テイチナーも情緒と情操との區別を一次的注意と二次的注意との區別に對應せしめ、前者に於ては狀況が有機體を壓倒し強制的に意識をも占據するに對し、後者に於ては狀況が複雑であつて躊躇と思慮とを要求し批判的態度が生ずると爲してゐるが、此の區別に従つて愛憎の如き持続的な特殊な感情的態度などは其の前者に入れられてゐる。かくて具體的な例としてテイチナーの情操をとれば彼は宗教的情操として畏れ、信仰、諦念、悔い等を、道德的情

操として耻と誇、有罪と無罪、自由と束縛、寛恕と報復等を、知的情操として一致と矛盾、容易と困難、真と偽等を擧げ、更に美的情操として美、醜、滑稽、崇高等を説いてゐる。クルューゲルが凡ての價值感情は深い感情であると云つてゐるのも、かゝる意味で此等の感情が情操であると云ふのと略、一致するであらう。併しかゝるものは必ずしも心の全體的構格に規定されてゐるものではなく、或ひは單なる表面的構格に規定され、或ひは自我の統制を越える場合が少くない。換言すればさういふ意味で常に深いものであると云ふことは出来ない。この事態はテイチナーも注意し、此等も必ずしも二次的注意の段階に止るものでなく、動もすれば一次的注意の段階に流れ情緒的態度に變つてしまふと云つてゐる。クルューゲルの凡ての價值感情は深い感情の中に屬するといふ主張に對し、コンヤグロサルトは價值感情必ずしも深くなく、感性的感情必ずしも淺くはなく、此の兩者を平行せしめたクルューゲルの考は誤であると論じてゐる。クルューゲルは併し全く此の兩者を一致せしめるものではない。又其の價值感情を一般的にテイチナーの情操の如く限定するならば其れが深い感情であることも矛盾なく主張出来る。此の立場からすれば前の場合とは反對に種々の激情など寧ろ淺いものとせられるであらう。

此處に於て我々は更に略、同じ方向は採つてゐるが、右とは別の道を行くものとしてシエーレル^(二)の見方を願ねばならぬ。シエーレルは感情の中心的な自我に對する親近なるものより疎遠なるものに至る多くの層を考へ、換言すればかゝる意味での深さの差を考へ、之に依つて感情の分類を試みてゐる。即ち感性的感情、生命的或ひは身體的感情、心的感情、精神的或ひは靈的感情が之である。感性的感情とはシエーレルの感情感覺と稱したもので、身體の局部に定位することの出来る、注意によつても解消せぬ感情である。例へば肩がこる苦しさとか、冷い飲料の快感の如きものである。生命的感情とは特に局部に定位することは出来ぬが身體の全體の状態と關係してゐる、疲れてゐるとか、清新とか、元氣が溢れてゐるとか云ふ感情である。心的感情とは悲しみとか、喜びとか云ふ身體の状態とは直接關係しない、心的原因に依つて生じ、自我の状態と感ぜられる感情を意味するものである。靈的感情とは至福とか、絶望とか云ふ絶對者に關して抱かれる感情である。此の系列の後のものは前のものに對し同時に比較的獨立的な立場を示し得る。例へば足がくるしくとも全體的には元氣が横溢することも出来、疲れてゐても喜びを感ずることが出来、更に悲しみに於ても同時に至福を感ずることが出来るのである。而して此の最後の

段階のものは自我も同時に之を離れることは出来ぬ最も深い絶對的な感情である。二つの感情が同時に存在し得るところに「深さ」の違ひを考へる基礎があるのである。此のシェーレルの見方に對しても、グロースルトなどは感情の深さと感情の價値的な高さとを同視するのは誤謬であると云つてゐる。普通の心理學からは前の三段階は大抵其の儘認められてゐるが、最後の靈的感情は問題となるであらう。併し人間の具體的生活を考へるならば、宗教的安心の境にある人であつても、其の愛兒を失ふた場合など、其の人が枯木死灰でない限りやはり悲しまぬわけには行かぬであらうが、併し其の人はなほ悲嘆に徒らに暮れることはなく、其のうち神の恩寵を見、至福の心境を失はぬであらう。或ひは救はれることを約束された人は安んじて不安であり得るであらう。^(三)かゝる至福、絶望、或ひは愛憎を越えた慈悲等も最も深い宗教的感情である。其れは人間の最も深い存在の問題に關係した感情である。さういふ意味でグロースルトなどの批難は正當に此の事態を認識してゐない爲である。云はねばならぬ。只此處に問題として残るのは絶望、至福と稱するものにも其の個體の構造の深さに依つて差異があることである。即ち兒童のかゝる感情は、或ひは的確にさう云ふ感情はないとすれば、其れに近い幸福、失望等は、陶冶された人間に於

ける程深刻ではないと云ふことである。又陶冶された人間に於ても長い時間の経過から見て根本的な絶望と、其の折だけの一時的な失望とを分けることが出来よう。かく一方發達的に考へることも我々心理學者としては常に肝要であるが、併し根本的な至福、絶望等を考へるときそれはやはり最も深い感情であると云はねばならない。其れ故特殊的な意味の深さは其の上存在するとしても、一般的な意味に於てシェーレルの深さの層の説はグロースルトの批難を斥けて認めねばならぬ。

之を要するに心が發達するにつれ其の構格が深められ又統一されて來る。其れに従つて其の心の末梢的な表面的規定を受ける感情と、中心的な深い自我の規定を受ける感情とが分れて來る。深い心の構造の規定を受ける感情が第二の意味の「深い」感情である。此の深い自我に統制された感情として通常情操が擧げられる。或ひはシェーレルの如く自我をも超えた絶對的感情として靈的感情のやうなものも主張される。併し此處に心の深い構造と一言にいつても之を自我と同一視は出來ず、なほ深い構造の制約を受けつゝ自我に背くもの、又淺い構造の制約を受けつゝ自我と一致するものがないであらうかと云ふ問題も生ずる。之に就いては特殊的な意味での「深さ」を考へるとき再說せねばならぬ。次に此處の意味の深さは寧ろ高さ

と呼ぶべきであるとの抗議が生ずるかも知れぬ。併し前項にも述べたやうに高さ
と云ふときは只種々の感情を並列して品等するに過ぎず、之に對して深さの概念は
心の構造を常に背景としてゐるから、高さと事實上一致するとしても概念上は之
を區別せねばならぬ。

註 (一) Titchener, E. B.: A Text-Book of Psychology, (1909,) 1926, pp. 498—503.

(二) Scheler: 前掲書 S. 340—357.

(三) 人間は生きてゐる限り完全に不安を除くことは恐らく出来ぬ。併し安んじて不安であり得るならば其の人は生き得る。
不安に對して不安を感じるとき其の人は死に依つて安んずるより外に道はなくなるであらう。神經質患者などは不安に對し
て益々不安となるのである。森田正馬「神經質療法」の如きは此の事態の正常な認識に基づくものであつて心理學的にも甚
だ興味多いものである。森田正馬「神經質及び神經衰弱症の療法」大正十年参照。

(附) 言葉の上から見た「深い」感情に就いて。

これは右の二項のやうに一般的な系統的なものではない。併し後の特殊の意味の深さでもない。これは大體同種類の事態を
表はすが併し深さの違つたものの意味する特別の言葉のあるものに注意したのである。即ち例へば憎むと嫌ひと云ふのなど
である。嫌ひといふ言葉は人間にも、動物にも、植物にも其の他無生物にも適用されるが、憎むといふ言葉は特に人間に對し
或ひは其の心情に對してのみ用ゐられる。あの男が嫌ひだといふ場合とある男を憎むといふ場合とを比べて見ると、前者は衝
動的であり、たとへそれが一生繼續しようと淺い感じを與へるに對し、後者は一時的であつても深刻な性格を持つてゐるので
ある。前者は只そのものから離れようとするに過ぎず離れて居ればそれで終るのに對し、後者にあつてはたとへ離れようがな
は何處迄もその緊張した關係を持續し其の相手を殘滅せずには置かぬと云ふやうな人格的な對立的な傾向を藏してゐる。併し
此の憎むと云ふ言葉でも「可愛い、」に對する「憎い」になるともつと輕くなる。可愛いさ餘つて憎さが百倍などの句に於て之は

認められるであらう。好きと云ふのと愛するのと云ふのとの間にも大體かゝる區別が存する。又かゝる相重なる言葉ではないが、呪ひとか恨みとかは深く、妬くとか猜むとかは浅い感じを興へる。かくの如くして言葉を便りとして、各感情の固有の深さの品等をなすことも出来るであらう。

(二) 特殊な意味に於ける感情の深さ。

特殊な意味に於ける「深さ」とは或る特殊の種類の場合の感情が或る場合には深いと云はれ、或る時には浅いと稱せられる場合の深さである。前の一般的な意味の「深さ」に於ては如何なる場合にも深いと云はれる感情の種類及び其の構造を見たが、茲に於ては或る感情が深いと云はれる場合の條件を明かにしなければならぬ。それに就いては此の條件となり得ると思はれる數箇の屬性を檢討しつゝ此の深さの概念を明かにしようと思ふ。

(イ) 持続的なもの。

クルエーゲルは其の感情説に於て其の持続的形式としての心物的構造を背景として感情の深さを考へてゐる。特殊な意味の深さとしては喜びや悲しみの深さもあるが、かゝるものは一時的なものではなく持続的なものであり、之を去らうとしても容易に去り得ないものである。然らば持続的な感情は必ず深いものと爲し得るであらうか。持続的と云へばシェーレルの云ふ生命的感情なども持続し得る。

即ち身體の衰弱してゐる場合など其の衰弱してゐる限り無力の感じ、虛弱の感じは續くであらう。かゝる感じは確かに心の基調となることもある。而して之が更に反省せられても、なほ其の反省が弱さのために浸されてしまふことのあるのも認めざるを得ない。併しまたかゝる身體の虛弱の感じが、例へば肺結核を患ふ人などの基調にあつても、なほ其の底に之に溺れることなく毅然として其の正氣を持してゐる人もある。かゝる場合後者の方が深い感情と見られるであらう。かく此の生命的感情などの持続性は直ちに深さの標徴とするとは出來ない。感性的感情なども同様である。情緒に就いて云へば悲しみとか喜びとか、これも持続することは出來る。併し之にも愛兒を喪つたときなどの深い悲しみと共に、一寸誤解された場合などの淡い悲しみの如きもあり得る。且その背後には之を抑へる更に根本的な感情も存在することがある。かくて情緒或ひは心的感情の如きも持続し得るが、其れ丈で深さの標徴とはなり得ない。情操或ひは特に靈的感情の如きになると通常持続する、而して深い。併し其の持続の程度の問題になるとなほ考へねばならぬ。持続的でない感情とは然らば如何なるものであらうか。快不快の如きが例へば句ひに對して生じたとする。句ひが保持されると共に快不快も續く。之を取り去れば

暫くその影響が残るが、之も次第に消え去るであらう。かゝる場合には併し持續するとは云はない。持續すると云ふには刺戟に對する相當の獨立性が保たれねばならない。一時的と云はれる怒りや恐れ^の如き、迅速に過ぎ去るとしてもなほ或る経過は持つ。其の點でそれは完全に瞬間的とはいへぬ。客觀的な時間の長さを比べるならば、一時的と云はれる憤怒の一経過の時間と、深いと云はれるユーモアの氣持の時間などとの間に、差の無いこともあり得るであらう。併し其の場合一時的な怒りの如きは迅速な一つの形の経過を示し、特に心の持續的構造からの深い統制を帯びぬに反し、眞のユーモアの氣持などは落付いた、短くとも経過ではない、持續と云ふ感じを與へる、深い心の持續的構造からの統制を持つてゐるものである。深い感情は要するに客觀的時間としては短時間現れるに過ぎぬ場合もあるが、併し右の如き意味での、云はゞ微分的な持續性は持たねばならぬ。併し持續的なもの必ずしも深いと云へない。持續的な感情でも心の持續的構格の表面的なものに依つて規定される場合は淺いわけである。かゝるものでもそれは根本に於て心の深い持續的構造に何等かの關聯を持つから持續するのであるとも見られようが、狹義に於てはかゝるものは淺いと見る方が適切であらう。

(ロ)鈍麻し難いもの。

これはクルューゲル^(一)や千葉敦教授なども深さを説く場合に擧げてゐる一つの性質であるが、右の持続的なものとも少し違ふ。此の例として好んで擧げられるのは流行唄などは一度聞けば二度と聞くに堪へぬが、ベートーヴェンとかバッハなど巨匠の作品になると幾度聞いても盡きぬ感銘があると云ふことである。即ち前者は鈍麻し易く淺く、後者は鈍麻し難く深いと爲される。然らば鈍麻し難いものは凡て深いと見ることが出来るであらうか。確かに一方鈍麻し難く深いものは存在する。例へば天に輝く星と心の内の道徳法は之を仰ぎ、之を思へば益、畏敬の念にうたれると云ふが如き之である。かゝるものは陶冶された心の深い構格に規定されたものであるが、此の外鈍麻し難いと或る意味で云ひ得る、之とは對蹠的の原始的な生命的な感情も存在する。即ち或る食物の如きは毎日之を食しても、なほ之に對する満足な感情は鈍麻せぬ場合がある。又これは持続的な激情とか情念とも呼ばれるものであるが、怒りの如きが或る人間に對して鈍麻することなく遭ふ毎に發する場合もある。而も此の怒りが、全自我を動かしてゐるやうな中心的なものでなく、表面的なものでもあり得る。併し此等は先に述べた一般的な意味に於ける深さのいづれか

に該當すると見ることが出来る。かくて鈍麻し難いものは何等かの意味で深いとも云へるが、併し特に之を限定せんとするならば始めに述べたものに適用するのが至當であらう。

註 (一) クルユーゲルは非鈍麻性乃至深さの本質的規定として感情の對立を擧げる。對立により、争闘によつて感情は深められと考へる。併しシュエーレルの靈的感情の如くなると、其の發生に於てはかゝるものに規定されたとしても、其れ自身としては絶對的なものとなるであらう。

(ハ) 隠匿されたもの。

次に隠されたものが深いと云ふことは出来ぬであらうか。此の見方を採る第一のものは精神分析説であり、其の意味でそれは深部心理學 Tiefenpsychologie と呼ばれるのである。精神分析説は神經病の解釋に於て、夢の説明に於て、日常生活の精神病に於て、其の他一切の心的現象の解釋に於て、通常意識せられるもの、背後に無意識的なものを考へる。彼の説に依れば、通常の心理學は意識的なもの、みを心的なものとし、其の間の關係を確める丈で満足してゐるが之は大なる錯誤であつて、寧ろ人間を動かしてゐる根本のものは無意識的なものである。此の無意識的なものは何等の困難もなく意識に上せられる所謂前意識的なものと、抑壓されて特別の操作を経ねば意識に上せ得ぬ狹義の無意識的なものがあり、後者中には抑壓せられ

てゐる反社會的、不道德的、特に性的の願望を中心とせる念執が存在する。かゝる通常意識には現れぬ、抑壓せられた念執 *Komplex* を研究し、之が如何に意識的なものを動かすかを解明するところに、精神分析説の深部心理學としての本領があるのである。かゝる考へ方を視ふ好個のものは其の夢説である。彼等に依れば夢には顯現内容と潜在思想とがある。通常我々が夢と呼ぶのは前者で、これは本當の夢ではない。本當の夢は無意識的な潜在思想である。顯現内容は多く不明確でとりとめもないため、夢は無意味のものであると云ふやうに見られ易い。併しそれはさう云ふ假装をしてゐるからであつて、眞實の夢の思想は驚くばかり合理的な、整合的な、日中のものと聊かも變るところのない思想である。併し其の中心に反社會的、不道德的願望があつてこれが社會的自我、即ち所謂檢閲官の眼をかすめて表に現れようとする。其處に檢閲の目を逃れる變装の必要が起り、かくて變装されて表に出たものが普通の夢、即ち夢の顯現内容である。此の變装の仕方に壓縮とか、轉移とか、造形的描寫とか、二次的推敵とかある。其の壓縮の如きは元來潜在思想に於ては明白に分離せるものが二次的に壓縮されて紛らはしい一つのものになるのである。かくて夢は抑壓された願望の假装された實現であると云ふ命題が生ずる。而して此の反

社會的、不道德的願望の中心的なものは子の異性の親に對する性的欲望即ち所謂エディプス念執であると云はれる。此の精神分析説の心の構造觀に對しては隠されたもの、抑壓されたもの、存在を一般に認めることが出来るか、かゝるものとして主張されてゐる念執の如きものが其の儘承認し得るか、並びに我々の問題と關係してかゝる抑壓されたものが深いものであると云ひ得るか、と云ふ問題が生ずる。我々は第二の點に就き其の根柢をなしてゐる精神分析説の根本的立場を檢討しよう。それは一方力學の見地をとりつゝ、他方全くの要素心理學の見地に立つてゐる。之を明かにするならば前の問題も自ら解決される。

現代の全體性心理學の立場にあるケーレルは、或ひは名こそ與へなかつたが其れより先クルューゲルも「氣付かないでゐる感覺」 *unbenetzte Empfindung* の考に對し強い反撃を加へ、かゝる見解の背後には所謂「恒常假定」 *Konstanzannahme* が存することを明かにした。即ち個々の刺戟に對應して恒常的に個々の感覺が生ずる、通常之に氣付かぬ場合にも注意深い分析に依つて之を見出すことが出来る故、なほ其れは存在すると考へなければならぬとの見解である。此の「恒常假定」は感覺と刺戟との間の問題であるが、併しかゝる考方は一面から見ると、心的發展の一方の極限の産物――

此處では心理學者の究極的分析的態度に依つて發展を進められた感覺——を其のまゝ此處まで發展せぬ、分析せられぬ全體——即ち此處では具體的な知覺内容——の根柢に一次的なものとして存在すると考へる考方である故、さういふ意味で發展した段階と發展しない段階との間にも一種の、ケールルのよりも一層廣い、幾分違つた意味での「恒常假定」が存在すると云ふことが出來よう。かゝる廣義の恒常假定は又精神分析説の基底に存する根本的な謬見である。即ち先の夢説について之を省るならば、第一に顯現内容即ち普通夢と考へられるものゝ背後に「本當の」夢の思想である潜在思想を考へることが注意せられる。後者から前者を造る過程が所謂夢の加工であり、前者から後者を見出す方法が彼等の夢判斷であるが、此の判斷法には聯想探索法と象徴解釋法とがある。象徴解釋法の機械的なのは暫く論外として、此處に吟味を要する重要なものは本來の精神分析法たる聯想探索法である。即ち普通の夢の内容を分解して夢の要素とし、之から聯想を辿つて分析者が適當と思惟する觀念迄之を辿つて行き、かゝる觀念を連結して一つの有意味の思想を再構成するのである。而してそれが其の儘顯現内容の根柢に存すると考へられる。併しかゝる解釋をするのは夢の意識を背景としてゝはなく、覺醒意識を媒介としてなされるので、之を其

のまゝ睡眠時の夢の根柢に存在してゐたと考へるところに、夢そのものゝ獨自の構造を無視した「恒常假定」がある。精神分析説に於て常に論難の焦點となる小兒性慾の説の如きも、兒童そのものゝ全體的構格を顧慮せず、成人の心的構造を其のまゝ見込む、やはり此の「恒常假定」の一つの現はれに過ぎぬことが了解せられるであらう。併し實驗心理學に於ける恒常假定が廢棄されたやうに、此處に於ける恒常假定も排棄せられねばならぬ。知覺内容の全體としての姿態が觀察されたやうに、夢には夢獨自の、兒童には兒童獨自の心性を、偏見なく承認し、然る後發達せる、先には覺醒時の心性と、後には成人の心性との比較を試みねばならぬ。かくの如くする時精神分析説で主張するやうな潜在思想の如きも、小兒性慾の如きも其のまゝでは認め得なくなる。例へば二人の特徴が一人の人に重なり合つてゐる「壓縮」の如きもヅエルネル(二)の如く夢の根源的現象として認むべきであつて、其の背後に條件分析的に素質的な二人の特徴の記憶を設定するのは不可はないが、之を直ちに現實的なものと爲し、之を本當のものと考へるところに誤謬がある。夢に於ては内容が一般に不明確であり、經過にもとりとめのないのが「本當」なのである。我々の見解によれば夢の世界は假定 Annahme が現實になる世界である。それで「そんなことがあつたら」と思つたこ

と、怖れたことも願つたことも、現實になつて來る世界である。又夢判斷としては一方條件分析と共に他方夢そのものに漂つてゐる感情的なもの——夢に於てはこれこそ根源的なものであり、それのみが眞のものである、それ以外の表象的なものは此の感情的なものを媒介として或る程度まで出鱈目に選ばれたものに過ぎぬ——の把握を必要とするのである。^(二)小兒性慾説にしても幼兒に於ける生命的愛情を認めたる點は多としなければならぬ。殊に三四歳の幼兒は母親にたく甘え又一々意地を張るなど、青年期に於けるものにも似た動搖期を現することにシャロット・ピユールなどは注意を喚起してゐるが、併し此の態度、此の生命的愛情はなほ成人の性慾とは甚だしく異るところを持つてゐる。乳を腹一杯に吸つてすやくと寢入る乳兒の顔に、性的満足の後、成人の顔を見入ると云ふことは全くの附會でなければならぬ。是の如く精神分析説には根柢的な要素心理學的な見方がある。無意識と稱せられるものは正に「氣付かないでゐる感覺」の擴げられたものである。かゝる謬見は清算せねばならぬ。併しなほ其の具體的な人間生活の種々相について心理學的にも價值ある思ひ付きを示してゐることは認めてよい。我々は精神分析説の構成を排する、併し其の思ひ付きには採るべきものも少くないと考へる。今其の點に檢

討を移さねばならぬ。

精神分析説の無意識、之と共に抑壓の概念が事實的根據を越えて構成的に擴げられたことは右に述べた通りであるが、抑壓及び之に依る意識面よりの消失の事實のあることは、なほ正當に認めねばならぬ。抑壓又は隱匿を廣く解すれば、之に有意的なものと無意的なものとのを分けることが出来る。前者には更に自分自身に對しての場合と、周圍の人に對しての場合とがある。例へば或る人に對して愛情を抱きながら自分の仕事に精進するため之を抑へる場合と、心一杯愛情に溢れながら人に觸れられると都合が悪いため之を外に現さぬ場合などである。無意的な場合の例としては或る人に對して憤りが發しようとしながら、他の事に取り紛れて其のまゝ發展しないので了つたが、なほ何處かひつかゝつてゐると云ふやうなものを舉げることが出来る。かゝる抑壓に依つて感情は衰退し、消滅に至る場合もあるが、併し抑壓を受けるやうな感情は容易に斷つことの出來ぬものであることが多い上に、自然的状態に置かれるならば自然に解消すべきものも抑壓のために却つて寄生的な存在を續けることさへあつて、寧ろ消滅せぬ方が多いとも見られる。其のため或ひは神經病的症狀を呈し、又は夢を生むが如き事態も生ずる。精神分析説はかゝる抑壓を解

いてカタルシスを行ふところに其の療法を持つのである。かゝる事實に關する限り精神分析説は正しい。然らば是の如き抑壓せられたものと深いものとの關係は如何であらうか。抑壓せられ易い感情は第一に前に述べた煩惱的感情である。此等は一般的に斷ち難いと云ふ意味では深いと稱することが出来る。併し其のうちにも特殊的に考へるとき、更に深いものと淺いものとを分けなければならぬ。即ち心の一部に漂つてゐるものと、殆ど心の全部を席捲せるものとであるが、此の何れにしても抑壓せられ、隠匿せられることが出来る。此の外價値に關する感情の如きも、又軽い氣分の如きも之を隠匿し、抑壓し得るであらう。かくて我々は抑壓されてゐることは深いものゝ本質的な性質ではないと云はねばならぬ。併し之に對して抑壓された感情こそ眞の自我的な深いものであると、恐らく精神分析説の人々は抗議するであらう。私は這般の事情を次の例を以て明かにしよう。我々は酒飲みに怒り上戸と云ふものゝ存在を知つてゐる。かゝる人が他人によく云ひがゝりをつける場合、殆ど偶然的で出鱈目のこともあるが、必ずしもさうでない場合も多い。即ち或る特定の人を捉へて、君は何時自分も自分を無視してゐるとか、生意氣であるとか、言ひがゝりをつけるのである。精神分析説の人であるならば、之を日常の社會的儀禮の

ため抑壓されてゐた怒りが飲酒による抑制力の低下を好機として表面に出たものであつて、此の怒りこそ其の人の深い本心なのであると説明するであらう。併し果してこれは本心と見ていゝものであらうか。かゝるものを衷心的な深い氣持であると斷ずることが出来るであらうか。私は出来ないと思ふ。酒を飲まぬ場合にも、恐らく其の心の何處かに、彼の奴は自分を馬鹿にしてゐる、生意氣な奴だ、といふやうな氣持がこだわつて居り、眞に釋然としてはゐないのである。併し此の憤懣は心の衷心に在るのではなく、日常は他の種々の反省や願慮や社會的儀禮などのために自然的に抑制されて寧ろ心の周邊部に近く存在するであらう。而して其の人の本心としてはさう云ふ氣持もあるが、併しそれが全部ではないと云ふのが眞實であらうと思ふ。夢の意識から其のまゝ現實の意識を推すことが出来ぬやうに飲酒の時の態度を直ちに其の人の本心と見ることは出来ぬ。併し勿論全然偶然的不是なものは無いものではない。其れ自身としては心の何處かにひつかゝつて居ても、一方からは自我毀損に對する怒りの如きは、最も深い根を持つとの意味では深いとも云ひ得る。併し本心の意味では深いとは云へない。

之を要するに抑壓されるものは其の根柢に本能的な傾向を藏することが少くな

く、其の意味で抑壓される感情は同時に深い根を持つ感情である場合が多いが、併し必ずしもさうでもない。殊に其の時の心の深い構格に全體的に規定されてゐるものでない場合が、寧ろ多いのである。かくて「隠匿されてゐる」こと乃至「抑壓されてゐる」ことを深さの要件と爲すことは出来ない。

註 (一) Werner, H.: Einführung in die Entwicklungspsychologie, 1926, S. 109.

(二) 夢を原始心性の一つの現象として見ることは極めて興味多いことであり、病的心性の理解などに資するところも少なくない。此處の叙述は輪廓のみで、まだ十分に夢の本態を盡してゐるものではない。

(二)心を多く領するもの。

ベルグソンは心的強度の問題を考へ、感覺の強さは物的刺戟に關係して量化せられると説き、更に直接外的刺戟と關係せぬ感情等の強さと云はれるのは、其の中に入する心的要素の數に依るものであると云ふ。彼は具體的な例として深い感情に就いて考察してゐる。一つの漠然たる欲望が次第に深い情念になつて行く場合など、始めは微かな欲望として我々の内的生活の片隅に異物の如く存在したものが、次第に多くの心的要素を滲透し、之を一樣に其れ自身の色で染めて了ふ。さうすると凡てのものも前とは變つたものゝやうに見え、凡ての感覺も凡ての觀念も生き返つたやうに見えて来る。即ちかくの如く深くなると共に、心的要素を次第に數多く抱

擁するやうになるのである。此の外彼は美的感情につき、表面的な筋肉的努力につき、更に注意、激情等について、其の心的強度の解釋を檢討してゐる。此のベルグソンの如く深さを其の中に含まれる心的要素の數に依つて規定することが出来るであらうか。併しベルグソンも其の中に心的要素を多數含むもの、即ち強いものを直ちに深いとするのではない。深いと云ふのは末梢的、身體的でない本來の心的感情について、其れが心内に於て心の多くの部分を席捲してゆく場合に云ふのであつて、此の立場で云へば末梢的、身體的の感情は其れが末梢的の心的要素を多數占領しても、即ち強くとも、淺いと云ひ得るわけである。彼が又激しいと云ふのは心的感情が心内に止らず末梢的な方面迄その攪亂を及ぼす場合に云ふのであつて、これも感情の強さの一つの現れ方であると思られる。此處に感情の強さ、深さ、激しさ等の區別を考察せねばならぬ。我々は如何なる場合に「深さ」と云ふ言葉を使ふか。深い悲しみ、深い恨み、深い憤り、深い憂ひ、深い悔い、深い憎しみ、深い憫み、深い愛情の如く一般に落付いた、身體的表出には顯著に激しくあらはれぬ、併し持續的な、心の奥を充してゐるものに用ひるのである。これが「深い根を持つた」又は「心の深い構格に規定せられた」と區別せられた、單なる「深い」といふ言葉の使はれる場合である。之に對して表面的

に心を攪すものを激しいと云ふ。激しい怒り、激しい痛みの如き之である。クルエーゲル等は喜びの如きにも深さを考へ、此の深さは強さとは異なるものであると爲してゐる。然らば此の深さと異なる強さは恐らく一時的な強さ、換言すれば激しさと呼んでいゝものであらう。併し此の激しさはベルグソンの如く必ずしも外部に出るものに對してはではなく、内部的にでも急劇に全自我を壓倒するものなどは、此處に入れていゝのではなからうか。要するに心を多く領するものと云つても、之に内部的な深さと、外面的な激しさとを、大體分けることが出来る。此の深さは必ずしも自我に合致するものでなくても、其の感情が内部的な心を持続的に多く領する場合に使はれるのである。

註 (一) Bergson: 前掲書。pp. 5—23.

(ホ)心の奥にあるもの。

此の心の奥にあるものには前に觸れた抑壓されたもの、殊に其の中の「片付けられずに了つたもの」Unreleasateなども入るであらう。心の奥の何處かにひつかつてゐるやうに感ずるものなど之である。例として心の底にある悲しみとか、腹立たしさなどが擧げられよう。併し心の奥と云ふとき其處にあるものは未だ明確な特殊

の感情としての分化を示してゐない場合が多い。抑壓されたものゝ外、未だ發展せぬ、萌芽的な心的感情なども之に屬する。心の奥にあるものと云ひ得るのは感性的感情でも生命的感情でもない、本來の心的感情でなければならぬ。靈的感情となると又かゝる異物として存在することは不可能となるであらう。心の奥にあるものと云ふ時、それが全く異物的である場合には深いとは云ひ得ない。併し心の底に自我そのものゝ氣持として存するやうになる時それは深いものとなる。併し之に就いては「自我的なもの」の項で述ぶべきである。

(へ) 性格的なもの。

或る個人の性格的特徴をなす感情の謂である。我々は浮々した氣持が始終続いてゐる人に於ては、其の氣持が其の人の性格的なものであると云ふことが出來よう。かゝるものは、其の人の一時的な深い悲しみよりは、其の人にとつて性格的なのである。其れ故淺くとも性格的な感情の場合があり、かゝる淺いものでも其の人の持續的な心的構造に規定されてゐると見られねばならぬ以上、かくの如き性格其れ自身淺いものでなければなくなる。又性格的なものとして深いものと淺いものと矛盾した二つの感情が存在しつゝ持續する場合もあるであらう。例へば或る人に

對して衷心に於ては愛情を抱きながら、むしろ表面的には憎しみを示すやうなことが一生續くこともあるであらう。其の場合には此の二つの感情が表裏するところに、其の人の性格的態度が成立するのである。其れ故性格的な感情は持續的な心的構造に基礎を置くとの意味では深いと云へるが、深い心の構格に規定された「或ひは「内部的な心を多く持續的に領する」といふやうな意味で深いとは必ずしも云へない。此の感情は感性的感情では勿論あり得ない。生命的感情は之に對し一つの基調は與へ得るが、それのみでは不十分である。之には心的感情及び靈的感情が必ず加入せねばならぬ。

(ト) 自我的なもの。

最後に自我的なものとの深さとの關係を考察しよう。此處に自我的な感情と云ふのは自我に眞實である感情、換言すれば其れを感じる人にとつて本當の、衷心からの感情を意味するのである。即ち今茲にハース等が感情の「まこと」Echtheitと「いつはり」Unechtheitとして取扱つた問題に觸れねばならぬ。感情のいつはりには自分の意識してゐるいつはりもあるが、自分では自覺せぬ自欺的ないつはりもある。ハース(一)の考へたのは前者であり、グローサル(二)トの説いてゐるのは後者である。グローサ

ルトは其れは自欺的に自己を高めんために本當の意慾とは相當せぬやうになされた感情であると爲し、之に單純な積極的ないつはりの感情として事實存在せぬところにあるやうに感ずるものと、事實あるところに無いやうに思ふもの即ち抑壓と、更に複雑なものとして昇華、深さの次元についての自欺、及び憤慨とを擧げてゐる。かゝるものに就いても深さとの關係も考へられるが、これよりもハースの「いつはり」についての方、之を一層よく見ることが出來ると思ふ。それは其の時の自分の本當の感情或ひは傾向に矛盾する感情に於て成立する。矛盾の仕方にも二つの感情が只相並んでゐる場合もあり、相闘争する場合もあり、兩者が一つに混合しようとする場合もある。例へば愉快に騒いでゐる人の心の片隅に沈鬱な暗い影がさし始める場合など、自分は全く愉快になつてゐるが之に對し矛盾する、そぐはぬ氣持として暗い影が勃興することもある。或ひは内心は憎惡に燃えながら、周圍に對する關係から外面は強ひて平靜を裝ふ場合もあらう。或ひは裏心に於ては或る人に對し深い愛執を抱きながら、外には其の人に對し憎しみの態度を現はすやうな、或ひは更に自身に對しても其の憎しみを信じさせようとさへするやうな場合もある。又表面は怒つてゐるが、裏面に於ては可笑しさに笑つてゐることもあらう。かゝる事例は

其の二つの傾向の矛盾の仕方に依り、又感情の層に於ける矛盾の箇所等に依り種々區別することが出来るが、之と深さとは然らば如何に關係するであらうか。通常自我的なもの、自我の傾向と合致する感情が深いと考へられる。併し此の自我は其の時の自我であり、或ひは一時的の氣紛れの自我、或ひは後の自覺された自我に對し無自覺的な自我でもあり得る。かくて例へば第一の例について考へるならば其の人の性格的な持續的感情はむしろ沈鬱的なもので其の際は酒を飲んで愉快になつてゐたのであり、之に對し元來の沈鬱的な氣持が擡頭して來たに過ぎぬとも見られよう。かゝる場合飲酒前は沈鬱的な感情が心を滿しこれが「まこと」のものであつたが、飲酒と共に次第に愉快になり、遂にこれが元の氣持を顛し自分にびつたりした本當の氣持となり、暫くこれが續いて後再び元來の沈鬱的な感情が勃興し、次第に酔の醒めると共に、これの方が自分の氣持になつて來ると云ふ經過をとることが出来る。かくの如く自我の位置は心の種々の層の間に動き得るものである。従つて自我的なもの、或ひは其の時の本當の氣持といふものは直ちに深いと云ふことは出来ない。一般的な意味に於ける深さの一つとして「深い心の構格に規定せられた」ものを採つたが、これは一時的な自我より一層深い、時には一時的な自我のために蔽はれもする

が併し根本的には其の根柢にあつて之を反省せしめ統制さへする持続的な自我の規定を意味するのである。かくて自我に合致するものと雖も、必ずしも深いとは限らぬことを認めねばならぬ。自我は生命的感情にも自らを置くことが出来る。通常其の所在は心的感情にあるのであるが、併し靈的感情に浸されるに至れば其處に於ける自我は不退轉の最も深いものとなるであらう。此處に於ては自我的なものと深いものが完全に一致するのである。

註 (一) Hans: 前掲論文。「深々」の問題に關聯しては特に S.S. 357—364.

(二) Grossart: 前掲論文。Bd. 8r, SS. 141—165.

以上の如き深さと關係せる數箇の感情の屬性の一通りの考察を終へた後に、我々は特殊な意味に於ける深さの概念を常識的に、又心理學的に限定せねばならぬ。我々が普通使つてゐる深い感情とは前にも述べたやうに、或る事態又は對象に結びついた、外部には其れほど激しく現れはしないが、心の内を持續的に充たし、時には自我に反省されることがあるとしても、稍もすれば自我をも其の中に浸し込んで了ふやうな、深い愛とか深い恨みとかの類の感情を意味するのである。然らば之に對して心理學的には感情の深さの概念を如何に限定すべきであらうか。之に對する一

つもの心理學的な考察の資料を與へるものはクルユーゲルの下に於けるヴェルデマン(二)などの實驗的研究である。即ち彼等は實驗室に於て實驗的に生ぜしめられた感情にも性質及び強さの外に深さの次元の存在を主張する。「總體意識内容の渾體質」としての感情は只感性的なものゝみに依つて規定されるのではなく、非感性的なもの、其の重要なものとして、例へば調和及び對比の關係、記憶像、呈示せられたものゝ素質に基く評價等が之に共鳴するのであるから、かゝる場合にも正當に此の存在を認め得る」と云ふのである。之に従つて、白い不規則の角錐に對して「高貴である。深い」とか、バツチュリ油のほひと青黑色の骰子との結合に對して「莊重。驚くべき調和。ヅイルヘルム・マイステルを想はせた」とかの全體印象の報告を得てゐる。併し此の深さの概念についてはクルユーゲルの言葉を引いて例示してゐるのみで、特に定義的には、クルユーゲルもさうであるが、述べてゐない。かゝるものは日常生活に於て深い感情と云はれ易い情念よりは美的情操などの方に近似してゐる。即ち特に長時間持續することも通常なく、人間の行動を根柢から規定するやうなこともない。其れにも拘らず深い感情が淺いものから區別される。此處に情念的な深さと情操的な深さを包括する深さを求めるならば、それは激しさに對して微分的であつて

も持続性を持ち、心の奥までじり／＼と浸して行くものと云ふことが出来るであらう。かゝるものは實驗室に於ても生じ得る。併し其の典型的なものは日常生活に於て其の人の中心的な意慾に觸れるとき生ずるものである。

註 (一) W. W. Wirtgen, W.: Über die Bedeutung des Gefühls für das Verhalten und Erinnern. Neue Psychol. Studien, Bd. 1, 1926, S. 307—372.

四 結論

感情の深さに關する以上の考察の結果を茲に要約し、なほ述べ足らなかつたところを補はうと思ふ。私は先づ一般に深いと見られる感情の種類を擧げ、之に生命的な意味で深い根を持つものと、精神的な意味で深い心の構造に規定せられるものとを分けた。前者の典型的なものは情緒或ひは激情であり、後者の代表的なものは情操である。なほ生命的な深い感情は場合により理性的な自我に對立するものとして煩惱的性格を帯びて來ることもある。かゝる一般的に深いと見られるものに對し、特殊の條件の下に於て深いと考へられるものも存在する。私は此の深さを規定するため、之と關係あるやうに説かれてゐた持続的なもの、鈍麻し難いもの、抑壓せられたもの、心を多く領するもの、心の奥にあるもの、性格的なもの、自我的なもの等を

採り、之と此の特殊的な意味に於ける深いものとを比較検討した。之によつて抑壓せられたものの、心の奥にあるもの、性格的なもの、(一時的な)自我的なもの等は必ずしも深いものではないこと、持続的なもの、鈍麻し難いもの、内心を多く領するもの等は深いものゝ一性質であることを明かにした。かくて日常生活に於けるものゝ外、實驗室に於て實驗的に生ぜしめられた感情の深さの如きをも顧慮し、之と區別せらるべき激しさに對して、微分的であつても持続性を持ち、心の奥までじり／＼と浸して行くものに就いて、特殊的に「深い」と云はるべきことを結論した。此處に於ては再び一般的特殊の區別以前に戻つて、具體的な事態を省察しつゝ、此の區別をも更めて批判せねばならぬ。

私は一般的な深さに「深い根を持つ」との意味の深さと「深い心の構格に規定された」との意味の深さとを分つたが、特殊的な深さを考へる場合にも情念的なものと情操的なものとが考慮せらるべき二つの極として現れて來た。之に依つて見れば一般的な深さに於て分けた二つの方向は深さ一般に通ずるものでないかとの問題が生ずる。先づ深い心の構格に規定されたものを取つて見る。一般的に、即ち常にかゝる性質を持つものは情操である。併し他の感情でも此の性格を持つとき深いと

云ひ得ぬであらうか。例へば感性的な不快でも心的な喜びでも其れは深い心の持續的構格からの規定を有し得る。かゝる場合其の不快、其の喜びには統制せられたものとして、只之に受動的に動かされてゐる時とは異なる色合ひが生じて來る。かゝるものも「深さ」と呼ぶのが適當であらう。併し是の如きものが生ずるには情操と同じく深く陶冶された人格が前提される。心の構格にも深いものと浅いものがある。兒童の如き其の浅いものにはかゝる意味での「深い」感情は生じ得ない。此の深さに對し「深い根を持つ」ものが對立する。これの代表的なものは本能的な感情である。これは殆ど凡ての人間が持つてゐるものであるが、併し其の激しさ乃至深さの程度には著しい相異がある。殊に煩惱的性格の如きは客觀的に或ひは自覺的に皆無である程の人もある。かゝる本能的な感情は持續的に心を充し易いと云ふ點で、又深いものになり易い。併し此等の感情が特殊の對象に對して持續する丈でなく、對象を替へても始終生じ易いとの意味で、深い根を持つとも云ひ得る。かゝる深さと前の深さとの間に多くの中間的な意味の深さが存在する。之には前者の如く自覺的統制の如きには進まぬ、併し後者の如く其の時々のものでもない、相對的な意味の深さ、即ち比較的浅い心であるとしても、其の中での比較的深い構造に依つて規定

された感情とか、十分に自覺されてはゐないが相當深い自我に合致する感情とかを擧げることが出來よう。右の二つの深さは主として機能的に定められたものであるが、之に對して主として現象的な觀察から生ずるものに持続的に内心を充してゐるとの第三の前には特殊的な意味の深さを論ずる場合觸れた、深さがある。之に對しては深い根を持つ感情も、深い心の構造に規定された感情も加入し得るが、此等が機能的に認知し易いのに對し、これは現象的に把握し易いものである。かくして感情の深さと云はれるものには其の主なる種類として「深い根を持つ」「深い心の構格に規定されてゐる」「持続的に内心を充す」の三つを分けることが出来る。私は始めに一般的の意味の深さと特殊の意味の深さとを分けて考察を進めた。之を離れて具體的なものに就いて考へるとき右の三者を區別することが出来る。一般的な意味の深さも認められるが併し此の方が實用上便宜な見易いものであらう。

茲に於て諸家の深さの概念を省ねばならぬ。クルューゲルは「深い心の構造に規定されてゐる」ものを「深い」としてゐる。其れ故その中には凡ての價值感情のみならず、又其の心の持続的構造に組織されてゐるときは喜び悲しみ、緊張弛緩の如きものでも含まれて來る。其の他實驗的に生ぜられた感情についても、其れが持続的人格

を背景とする以上、其の深淺が現れて來る。其れ故クルユイゲルは深さと高さとを平行せしめたと主張するグローサルト、コーンは誤解してゐる。ハースは私が先に性格的なもの、自我的なもの、心の奥にあるもの等を種々の意味の深さとして述べてゐる。コーンは其の感情の中に全自我が加入する時深い。其れ故身體的な疲れの如きものでも深いと云へるし、高い感情でも日曜の敬虔の如きものは淺いと云はねばならぬと論じてゐる。グローサルトは「高さ」と區別して、或る個人の中心的な意欲に基くもの、及び深く持續的に經驗された感情について「深さ」を用ゐてゐる。千葉教授は其の固有意識乃至無記感情の體系を背景として深さを説いて居られるが、これも「持續的な深い人格に規定された」ものを深いとされるので、略、クルユイゲルの所説と一致する。教授が、クルユイゲルは「深さ」を「暖さ」と同視してゐると云はれたのはクルユイゲルに對する誤解でなければならぬ。ベルグソンは前述の如く心の内部を充すものを深いと稱する。シエーレルは又感情の層を考へ身的、心的、靈的と進むにつれ深くなると見る。精神分析説の人々は抑壓されたものを深いと考へる。此等の諸説の不一致には言葉使ひの上のものが少くなく、其の點については未だ明かにしなかつたものもあるが、此等の基礎となる事態は大體先の考察中に相當解明して

之を述べ、之に對する態度も一應定めることが出來たと思ふ。

此の外感情の深さには右の如く屬性として、^々はなく感情の本質的なものと見られる「深さ」がある。西田教授が感情は感覺に對し次元を異にする深いものであると云はれ、ヨハネス・フォルケルトが^(一)深さは感情の本質的な一面であるに止らず、感情の中心的なもの、本質そのものであると説いてゐるが如き之である。これについては感情の本質を考へる場合に省察を加へねばならぬ。又「深さ」に關してはクルューゲルも之を感情に限らず、思考又は意志の如きについて之を論じ、ヰイリアム・シュテルン^(二)の如きも「ひと」の全體に對し深さ *personale Tiefe* を説いてゐる。此等の考察も此處には感情の深さを中心とした都合上後日の機會に譲り度い。只レヰインもシュテルンの所説に追加してゐるやうに、素質的な心を考へる場合、層や組織の關係がさう單純なものではないことを注意して置かねばならない。

以上感情の深さの問題に就いて一通り省察を加へ、人間の具體的な情意生活の諸相について相當探索するところもあつたが、なほ之に關する事實の蒐集について、又種々の見地の解明について、更に我々の立場の歸結について、未だ不十分な點が少くない。方法論的にも殊に現象學的研究と發達心理學的研究の併用などに就いても

問題は起ると思ふ。之等に就いては今後事實を蒐集しつゝ、反省を深めることに依つて研究を進め、次第に完璧を期し度い。情意心理學の研究は人間の具體的な生活に關するところ甚だ多いため極めて困難である。併し一步一步之を克服せねばならぬ。心理學者は細密な事實的研究を捨てゝはならぬ。併し其の根柢にかゝる具體的人間の問題を忘れてはならない。^(三)

註 (一) Volkelt, J.: Versuch über Fühlen und Wollen. 1930. S. 55.

(二) Stern, W.: Zur Theorie der personalen Ganzheit und Tiefe. Ber. u. d. XI. Kongr. f. exp. Psychol. 1930. S. 155—164.

(三) 野上俊夫「抽象的心理學と具體的心理學」(哲學研究、第七卷、六五—六八頁)大正十一年。